
第 4 章

長野県下伊那郡阿智村における 中学校統合による影響と変化

ABSTRACT

はじめに

1. 調査の概要
2. 浪合中学校の見解
3. 阿智中学校の見解
4. 浪合通年合宿センターの統合に対する見解
5. 教育委員会の見解
6. 結論

執筆者

(ワーキング・グループ4)

武藤友実**

張慧婧*

レザイ・アリレザイ*

會田幹哉

指導教員

大名 力

**グループ・リーダー

*サブリーダー

Influences and Changes by Junior High School Integration in Achi Village, Shimoina County, Nagano Prefecture

Abstract

This report aims to discover influences and changes which may be brought on by the integration of junior high schools in Achi Village, Nagano Prefecture. A survey was conducted during a three day period and focused on the opinions of people who are involved in school integration. The content of this report is as follows:

- Opinions of Namiai Elementary School and Junior High School
- Opinions of Achi Junior High School
- Opinions of Namiai Ikuyukai a Non Profit Organization (NPO)
- Views of Board of Education in Achi Village
- Conclusion

Chapter one describes the objectives of the survey and methodology which we applied during our research. Chapter two and three assess the standing point of the participants in school integration. The assessment was concluded through a series of interviews and questionnaires. Chapter four provides an explanation of the opinion of Namiai Ikuyukai on school integration. The opinion of Namiai Ikuyukai was concluded by interviewing the center manager of the organization. Chapter five describes the views of the Board of Education in Achi Village which is in charge of school integration. Chapter six concludes the research based on all perceptions collected during the 3 day field survey.

長野県下伊那郡阿智村における中学校統合による影響と変化

はじめに

今日、「平成の大合併」により市町村は大幅に減少している。総務省によると平成11年3月31日現在の市町村数は3,232、平成22年2月1日には1,773になると予想されている¹。特に過疎化・少子高齢化が進んでいる地域では、税収入や人口流出といった深刻な問題に直面している。

今回、調査を行った長野県下伊那郡阿智村は、2年前の2006年に旧浪合村と合併を行った。2008年現在、阿智村、清内路村、平谷村の3村に立地する4つの中学校（阿智中学校、浪合中学校、清内路中学校、平谷中学校）の統合が2010年度から随時開始され、「統合阿智中学校」となる。準備会議としての「統合阿智中学校連絡協議会」が3村の関係者（3村の教育委員長及び教育長、4中学校長）によって随時開催され、また、「阿智中学校建設委員会」が阿智村内に設置されるといった統合に向けた実質的な取り組みが行われている。具体的な取り組みの一部として、①学校間の交流活動の促進（各中学校の生徒会を中心とした学校行事の交流等）②学習面における取り組み（交流学习にて授業体験や、調理実習を行う等）③学校間の教員による情報交換（各学校の各授業教科の指導経緯や今後の運営計画、部活動の運営に関する協議を行う等）を通じて、統合後に向けた取り組みを展開している。

阿智村が直面している問題は、日本の他地域も直面している問題であり、ますます少子高齢化が進むと思われる今日、市町村合併、それに伴う学校統合は市町村として存続していくために必要であると思われる。今回は阿智村と周辺の村々の統合によって生じる変化や問題を「教育・文化」という視点から調査を行った。

調査の制限

近年の学校統合に関する資料及び先行研究の量が限られ、当該事例に関するデータの入手が困難であった為、比較調査が実現できなかった。また、学校統合という問題が住民感情並びに地元地域のアイデンティティに深く関わる繊細な問題であり、慎重に調査を行う必要があった為、今回の調査で入手したデータには一定の制限を加えて当報告書を執筆した。

1. 調査の概要

1-1. 調査の目的

周辺地域の村との統合により大きく変わりつつある阿智村を調査するにあたり、当グループは阿智中学校と浪合中学校の統合について焦点を当て、以下のように目的を設定した²。

中学校の統合に関係する当事者の中で、学校長・教頭、教員、生徒、行政、教育委員会の見解を中心に考察し、中学校の統合が実現するにあたって生じるとと思われる様々な変化や影響や課題を導き出すことを目的とする。

1-2. 調査方法

後日郵送にてご回答を得た各中学校教員、生徒へのアンケート配布を除き、学校長・教頭、行政、教育委員会、各関係者へは事前に提供された資料等をもとに調査前に質問表を作成した。それらに基づきインタビューを行いそれぞれの意見、見解を調べた。統合に対して抱いている期待・懸念を中心としたインタビューを行った。

1-3. 調査日程と訪問先

各訪問先と日程は以下の通りである。

11月4日			午後1: 阿智村教育委員会	午後2: 阿智村教育委員会
11月5日	午前1:浪合小中学校	午前2:浪合小中学校	午後1: 浪合通年合宿センター	午後2: 野外活動研究財団
11月6日	午前1:阿智中学校	午前2:阿智中学校	午後:阿智村役場 (協働活動推進課)	

2. 浪合中学校の見解

調査対象者、調査方式、回答者は以下の通りである

調査対象者	調査方式	回答者数
学校校長・教頭	インタビュー	3名
教員	アンケート	5名
生徒(中学1年生)	アンケート	6名(内4名は女子)

2-1. 浪合中学校の概要

浪合小中学校には小学生52名・中学生24名の計76名の児童・生徒が在籍しており、各学年1クラスという構成である(2008年4月現在)。公立学校の中でも珍しい特色が多く、新聞やテレビ等で取り上げられることも多い。小中学校が一か所に併設されており、教室と廊下を仕切る壁がない「オープンスクール」形態を採用している。小学校と中学校はアーチ状の透明な渡り廊下で繋がれ、給食は同じく隣接されている保育園の園児と合同で食べる仕組みとなっている。中学校は教科ごとの教室であるため、生徒は授業ごとに各教科の教室へ移動をする。浪合地区で活動する「NPO法人 なみあい育遊会」と連携して山村留学や、海外の小中学生の体験入学の受け入れを積極的に行うユニークな学校である。

2-2. 統合に向けての取り組み

現小学校6年生が新中学校3年生となって、阿智中学校へ編入する形で統合が行われる。したがって、学校側としては、近隣小学校との交流活動の一環として合同遠足や福祉教育や、また統合に向けての力となるであろう話し合い活動に取り組んでいる。

これは後述の教育委員会も検討していることであるが、少人数の浪合の生徒が1クラス35人程となるクラスへ加わることとなるので、何人かの浪合中学校の教員の阿智中学校への転任を浪合小中学校としても一つの案として検討している。これは、浪合地区のことを知っている教員が阿智へ赴任することで生徒にとって支えとなるのではないのか、という配慮によるものである。すでに「統合が開始される3年後を見据えた人事を行っている」と校長先生は述べていた。

浪合中学校の校舎への影響についてであるが、小学校が併設されているため音楽室・家庭科室等の特別教室については、統合後も小学生が使用していくので特に問題はないとのことである。中学校は教科ごとに教室を設けているため、それらをどのように活用していくかということに関しては、現在のところ検討中である。

統合に関して不安を抱いている児童がいるかという質問に対しては、小学生は統合に関してそれほど考えてはおらず、更に、彼らはまだ小学生ということもあり、特別な対策は行っていないということである。

2-3. 学校側の統合に対する懸念・期待事項³

2-3-1. 懸念事項

主に4つの懸念事項が以下に挙げられる。

・小中学一貫教育の長所がなくなってしまう
・人間関係、友人関係による生徒への精神面への影響
・通年合宿センターとの交流への影響
・浪合地区の地域行事への影響

まず小中一貫教育のメリットである「個」に応じた指導が出来なくなることが挙げられた。浪合小中学校の1クラス平均は8.7人であり⁴、教員にとって生徒一人一人を把握した授業を行うことは容易であると思われる。したがって「統合によって生徒の実態が掴みにくくなるのでは」と校長先生は指摘していた。

2点目として、小中学校の教員の交流(校長はこれを教員間の「相互乗り入れ」、と述べていた)が難しくなることである。「相互乗り入れ」によって、浪合小中学校双方の教員は他の一般小中学校では得られない経験をすることが出来るとのことである。小学校教員が中学校で教鞭をとり、また中学校教員が小学校で教えるというようなことが浪合小中学校では頻繁に行われている。

そして、少人数クラスから中規模クラスに変わることで、生徒が不安を抱くのではないのか、という人間関係、友人関係による生徒への精神面への影響についてである。現時点で統合後、阿智中学校へ通

うこととなる、児童からの不安の声は挙がっていない。そのようなことが問題にならないために現段階で阿智地区の学校と交流を行っている。

通年合宿センターについては後ほど記述がするが、浪合小中学校の特色を知った上での希望者が多いということであるので、中学校のみが統合されることによって希望者が減少するかもしれないということであった。

浪合地区独自の地域行事については、インタビュー時に具体例として「村社祭」、資源回収、地区運動会が挙げられた。原則として、阿智中学校との統合後、浪合地区の行事に合わせて阿智中学校の授業予定や行事を変えることは予定されていない。浪合中学校の生徒は行事の中で中心的な役割を果たしており、地元住民も将来の地区全体の担い手がいなくなるのではと懸念している。アンケートに回答した教員の中でも、「村社祭」について「自分たちの地域だという意識が薄れていくのではないか」という意見を持つ教員がいた。地区運動会は、午前中に開催される浪合小中学校運動会の後に行われるため、中学生が抜けることによって運営方法への影響が出ると考えられている。しかし、浪合自治会はすでに「村社祭」は土日祝日に日程を変更し対応しているとのことである。

浪合中学校の1年生から3年生までが、月に一度地元のデイケアセンターの訪問を行っているが、統合後は実施されなくなる恐れもある。

2-3-2. 期待事項

次に、「期待」について以下の意見が挙がった。

・ 集団生活の大切さを身に付けることができる。
・ 将来を担う阿智村の中学生としての団結
・ 友人が増えることによる生徒同士の触発
・ 地域活動への積極的参加

ここでは少人数教育の良い点の裏返し「期待」となっているとと言える。クラスの生徒数が増えることで、ある程度の人数の中で集団生活を体験することができる。少人数教育や「個」に応じた授業だけが良いわけではない、と校長先生は述べていた。

そして、団結心の問題である。阿智村と浪合村は平成18年に統合し「阿智村」となった。しかし、中学校統合はそれよりも時期が遅いため、現在もそれぞれの地区の学校へ通学をしている。したがって、統合後に同じ中学校で学び、生活をしていくことで浪合地区の生徒も「阿智村」の住民としての意識が芽生え、村の将来を担ってほしいと考えている。一方で、若者の定住を進めていくことは難しいかもしれないという厳しい現実もある。そして、3点目は集団生活とも関わりがあるが、友人が増えることで学生生活に新たな刺激がもたらされるという期待である。最後の地域活動に関しては、阿智村全体の活動に参加することにより村を盛り上げてほしいという2点目とも重なる内容である。

2-4. 生徒の統合に対する見解

今回、現中学1年生6名からアンケートの回答を得た⁵。「阿智中との統合に対するイメージ」についての自由記述では、全て肯定的な回答であった。「友達がいっぱいできる(行事が盛り上がる)」が3人、「にぎやかになる」が4人である(複数回答)。「“新”阿智中学校への期待」の有無では「はい」が3人、「いいえ」が2人、一人は無回答であった。しかし、アンケート回答者全員が、浪合中がなくなることさみしいと感じている。「具体的な期待」も授業や行事がにぎやかになることに集中した。

3. 阿智中学校の見解

3-1. 阿智中学校の概要⁶

阿智村立阿智中学校は1961年4月に開校し、本年(2008年)で開校47年目を迎えた。学校目標として①自ら学び、自ら行動できる力(自主)②強い心身と豊かな心(清明)③共に磨き合う態度(協同)を掲げている。さらに具体目標として、①明るく、さわやかで、潤いのある学校づくり、②生徒が心おどらすような授業づくり、③先生が支え生徒を前面に出した諸活動、④地域社会と共に育つ学校づくりを挙げている。

阿智中学校生徒数(2008年度現在)

学年	生徒数			合計
		知障	情障	
中学1年生	71名	1名	0名	182名
中学2年生	55名	1名	1名	
中学3年生	51名	1名	1名	

(出典：名古屋大学大学院調査実習班訪問資料より)

3-2. 統合に向けての取り組み

阿智中学校は統合の際、浪合中学校、清内路中学校、平谷中学校の3校の生徒を受け入れる側の中学校として、2010年度より“統合阿智中学校”として新しくスタートを切る。上記3校の生徒の受け入れにより生徒数が増加する為、校舎並びに体育館の増改築工事が現在行われている。

統合による今後の生徒の学校生活に向けた取り組みとして、先の章で上述した統合対象中学校間における①生徒会を中心とした学校間の行事交流活動の促進、②生徒による体験授業や家庭科の調理実習などを通じた交流学习、③教員による各授業教科の指導経緯や部活動の運営に関する学校間の情報交換を行っている。

3-3. 統合に対する意識並びに見解

約1年3ヶ月後（2008年12月時点）の統合開始を控え、この調査では阿智中学校の学校長、教員並びに生徒に今回の統合に対する意識並びに見解の調査を行った。生徒の調査対象年次については、統合開始時に中学3年生として実際に統合を体験するので、今回は中学1年生の生徒を調査対象とした。調査対象者、調査方式、並びに回答者数は表の通りである。

調査対象者、調査方式、回答者

調査対象者	調査方式	回答者数
学校長・教頭	インタビュー	2名
教員	アンケート	6名
生徒（中学1年生）	アンケート	51名（内27名は女子）

注) 教員、生徒への調査は後日アンケート用紙を送付し、回答結果を郵便にて送付の方法で行った。

3-3-1. 学校長・教頭の統合に対する意識並びに見解

学校長・教頭への調査はインタビュー方式にて行った。2010年の統合開始に向け、学校長・教頭は統合の舵取りを他中学校と共に連携しながら推進している。統合を契機に期待することや懸念することを中心にインタビューを行った結果、今後の方向性として、統合により期待されることはより大きくし、懸念される事項に関しては今後少なくしていく努力の重要性について、強く認識していることが分かった。阿智中学校自体ではなく、特に統合される他中学校が抱えているであろう問題についての考えが多く聞かれた。特に、他中学校の生徒が少人数から大人数の学校へ通うことへの不安を抱いていることを懸念されていた。又、浪合中学校の大きな特徴である山村留学への影響も懸念していた。逆に統合により部活動の選択の幅が広がることや生徒間同士の勉強面での競争は大人数クラスで、生徒数の多い学校ならではの特徴であり、今後進学並びに社会にて働く上でプラス面として働くことができる要素であることを指摘されていた。

3-3-2. 教員の統合に対する意識並びに見解

教員への調査はアンケート方式で行い、6名の教員から回答を得た。教員は日頃から授業や生活指導を通じて生徒と密接に接しており、今回の統合に対し教員の立場からどのような期待や懸念を持ち、そして統合に向けて生徒に対しどのような取り組みを行っているのかに焦点を置き調査を行った。質問並びに回答結果は以下の通りである。

【統合に意識して生徒に対して具体的に行っていることの有無について】

行っている	行っていない
3名	3名

【統合に際し不安を抱いている生徒に対し不安解消の為の取り組みの有無について】

行っている	行っていない
2名	4名

【生徒の不安解消の為にしている具体的な取り組みについて】

- 交流学習を通じて、同じ中学生の仲間であることを実感させる
- 生徒会を中心とした交流を促進し、他中学校の行事への参加をする

【統合に際し、生徒に期待していること】

仲間や友人が増えることによる生徒同士の触発（人間的な成長や勉学面など）
将来を担う阿智村の中学生としての団結
地域活動により密着し、積極的に参加すること

【統合に際し、生徒に懸念していること】

生徒の人間関係・友人関係から来る精神面への影響（いじめや出身中学校間の衝突など）
生徒の学力面や学習への意欲への影響
統合時の2,3年生の新しい生徒への適応
遠距離通学する生徒が増えるので、健康面が心配。部活や勉強面での疲労も。

上記の回答の中でも、「地域行事」と「通学手段」については教員のみならず、校長・教頭も影響・変化がみられるだろうという見解である。

地域行事については、統合後は基本的に阿智中学校（阿智地区）の学校予定に合わせるようになる為、他地区で行われる地域行事の日程や青少年の参加への影響が指摘された。特に浪合地区では村社祭が行われる為、開催日は平日になることがあった。しかしながら青少年の参加減少が年々高まり、中学校統合により中学生の参加が困難になることが予想されていたが、先述のように、本年より休日である土曜日、日曜日が開催日となっている。

通学手段については、統合により学校までの通学距離が遠距離になる生徒は通学バスを利用することになるが、1) 生徒の安全確保の問題（各生徒の家庭が離れているので集団登校が出来ない為）、2) 登下校時間の変化により1日の授業時間を減らす結果、授業日数を増やすこととなるため、夏季・冬季休暇が減少する（登下校時間がバスの発着時間が基準となる為）、3) 部活動時間への影響（朝練習や夕方の練習時間が減少する為）が指摘された。

3-3-3. 生徒の統合に対する意識並びに見解

実際に統合された阿智中学校で1年間(2010年度に中学3年生へ進級)学習することになる中学1年生の生徒51名を対象にアンケート方式にて調査を行った。調査項目の大筋としては、統合への期待や不安、そしてイメージについて生徒としての立場の視点からの見解を中心に焦点を当てた。質問、回答は以下の通りである。

統合阿智中学校への期待

期待する	期待しない
59%	41%

「期待する」と回答した生徒の理由(上位3回答/複数回答にて調査)

1) 新しい友人ができることへの期待
2) 授業がにぎやかになることへの期待
3) 生徒の人数が増えることにより学校行事などで盛り上がることへの期待

統合阿智中学校への不安

不安がある	不安はない	特に気にしていない
18%	35%	47%

「不安がある」と回答した生徒の理由(上位4回答/複数回答にて調査)

1) 友人関係がうまくいかどうかという不安
2) 今までの“阿智中学校らしさ”が消えてしまうのではないかと不安
3) 新しく生徒が来ることで、勉強に集中できるかどうかという不安
4) イジメが起こるのではないかと不安

今回の統合について抱いているイメージ(自由記述方式にて調査、全回答)

プラスイメージ

- 楽しそう
- みんなが仲良くなれる
- 学校が大きくなる
- 賑やかで人数が多くなるので楽しみ
- 明るくなる
- 明るく楽しくなってくれば良い友達ができる
- いじめない学校、元気のある学校
- 友情関係が豊かな学校

マイナスイメージ

- いじめが増えそう
- ちゃんと接することができるか
- ほかの中学校の人たちがちょっと怖そう
- あんまり一緒になりたくない
- 人数が増えてちょっとヤダ
- 阿智中のイメージが悪くなりそうで心配

期待すると回答した生徒は約6割に及んだ。期待する理由として、生徒は友人が多くなることや、それにより学校での授業や行事がより盛り上がりことを挙げている。不安を感じると回答した生徒は約2割であった。理由としては、友人関係構築への不安やイジメへの懸念、そして統合によりこれまでの阿智中学校の特色などが無くなってしまふことへの懸念などが挙げられた。これら上記の回答は調査者側が事前に準備した質問であった。その為生徒自身の内面に抱く考えやイメージをより深く把握することを目的に、最終質問は自由回答方式にて行った。その結果、調査者側が用意した質問への回答と類似する点だけでなく、それら以外の回答も挙げられた。全体的に生徒は「期待すること」、そして「不安を感じること」の両面を明確に抱いていることが理解できる。

4. 浪合通年合宿センターの統合に対する見解

通年合宿センターの所長である吉田氏に、中学校統合に関して期待又は懸念事項に関してインタビューを行った。

4-1. 浪合通年合宿センターとは

特定非営利活動法人（NPO 法人）「なみあい育遊会」（以下 育遊会）は、平成6年2月に旧浪合村によって設立された任意団体「浪合通年合宿センター」を母体とし平成18年12月25日に長野県によって認証された NPO 法人である。この会は、阿智村浪合地区にて山村留学を行っている。県内及び県外からの毎年小学生（小学2年生）及び中学生およそ14名が一つ屋根の下で共同生活を行う、という珍しい形態をとっている。小中学生は同センターにて日常生活を送りながら、浪合小中学校にて学んでいる。他にも自然体験と共同生活体験、またはスポーツ体験を軸にして、浪合地区に密着した活動を行っている。また「浪合通年合宿センター」と「なみあい遊楽館」の指定管理者として平成19年3月に阿智村と契約を交わし、管理・運営行うことになった。

4-2-1. 浪合通年合宿センターの見解 ① 統合に対するセンターの期待

統合により、山村留学に来ている子供達も阿智中学校へ通学することとなる。阿智中では部活の種類が浪合中学校よりも多く、選択肢が増えることが期待事項として初めに挙げられた。そして、中規模学校での集団生活によって様々な対人関係の経験ができるようになることを期待している。吉田氏の話では、多くではないが、山村留学へ来たので小規模学校への通学を希望している児童・生徒だけではなく、先に挙げたように、部活動の選択ができ、また、集団生活を送りたいと考えている希望者もいるとのことである。

4-2-2. 浪合通年合宿センターの見解 ② 統合に対するセンターの懸念

1点目にバス通学に関してであるが、育遊会の見解は先の学校のものとは異なる視点も含まれている。それは、健康への影響として通学手段を挙げたことである。「徒歩通学により、健康な体を作ってほしい」というセンターの願いは、山村留学に来る子どもの願いでもある。今まで徒歩で通学することによ

って足腰が鍛えられてきたので、統合後にバス通学になっていくことで自動的に歩くことが減り、自然を楽しみながらの通学もできなくなることが残念と指摘していた。

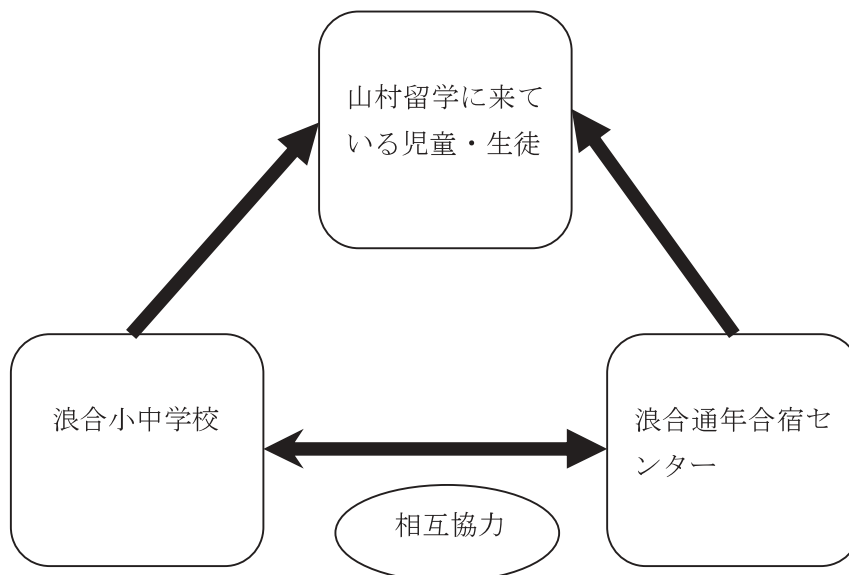
次に挙げたことは、阿智・浪合両中学校と同じく人間関係作りについてである。今まで小中一貫校の浪合小中学校で同じクラスの中で生活してきた児童・生徒は統合後、以前より大きな集団に入ることになり、そこでの人間関係作りに時間がかかるのではないかと、という思いである。

4-2-3. 浪合通年合宿センターの見解 ③ 統合によるセンターに与える影響

吉田氏によると、「自然に囲まれた中で保育園や小学校、中学校が一体となって存在している学校に魅力を感じてくれる子どもが数多くいるので、学校統合によりその魅力が失われてしまうことが寂しい」更に、「山村留学に入りたいと考える子供や生徒達は、途中で統合されるなら考え直すかもしれない」と述べていた。浪合小中学校へ通いたいから山村留学を希望する児童や生徒がいるので、統合により希望者数が減少する恐れがあるかもしれない、ということがその理由である。そして、今後の合宿センターの運営展開への影響も出るかもしれないとのことであった。学校統合による山村留学を希望する児童や生徒への影響を懸念している。

その反面、山村留学を希望するが（浪合中学校の）部活動の種類が少ない為（現在はソフトテニス部のみ）来ていない子どもたちは、学校統合後に部活の選択肢が増加することにより山村留学を希望する場合もあるが、現在のところはまだ少数派とのことである。

現在の浪合通年合宿センターと浪合小中学校及び児童・生徒の相関図



5. 教育委員会の見解

学校統合決定時に阿智村教育委員会にて学校統合の業務に従事し、現在同役場の協働活動推進課課長の林茂伸氏へインタビューを行った。

5-1. 阿智村の学校統合の背景

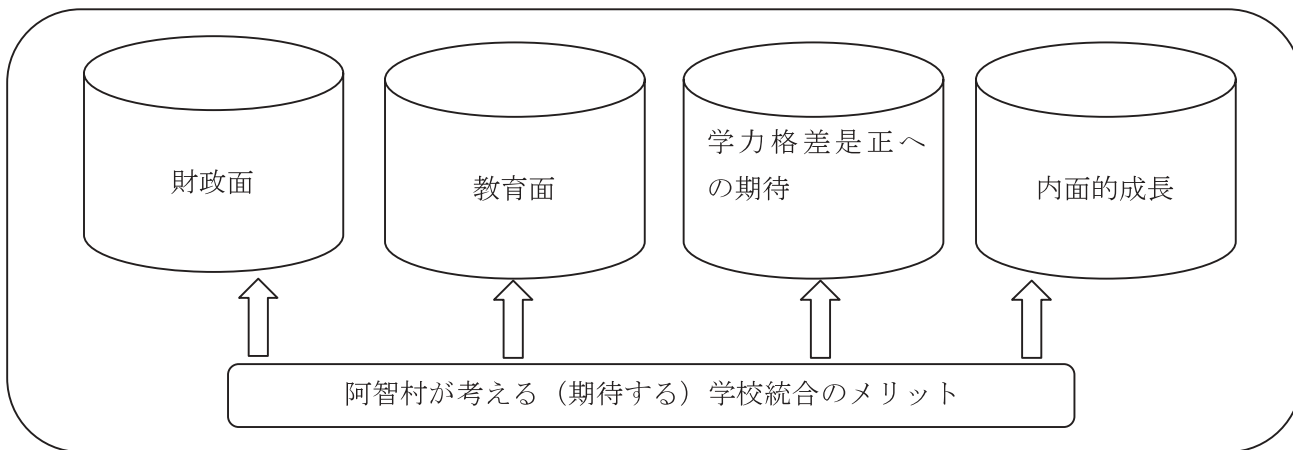
阿智村と浪合村の統合が決定された時に、学校統合が一つの条件として含まれていたことが大きな背景となっている。林氏によると、全国的に問題となっている少子高齢化も、阿智村における学校統合が進められている一因となっている。配布された資料のデータによると、人口1万人未満の小規模自治体が多い都道府県は北海道が（144自治体）、その次に長野県（43自治体）である⁷。出生率の低さは特に深刻であり、このままでは複式学級にせざる得ない状況になっていたということである。そして、阿智中学校の学舎建て替えの要望が村の統合決定以前からあったため、周辺の村へ統合の声掛けを行ったところ統合が正式に決まり、学校統合も進められることとなった。小学校については、児童の通学距離や時間に限度があるため、統合は行われなかったこととなった。中学校に関しては、「通学もバスを使えばそれほど問題にならないのではないのか」、また「少人数教育では生徒間での競争ない」、といった理由もあり統合が決定された。

5-2. 阿智村内の学校統合におけるメリット

4つの事項がメリットとして以下に挙げられた。財政面については、統合によって長野県は教員の人員費削減が可能となる。教育面においては、特に浪合地区の生徒はクラスや部活動の規模拡大により生徒同士の触発や競争意識の増加、活動の選択肢が広がることが期待できる。また、生徒が少ない学校は申請して認められれば「加配制度⁸」を適用できるので、必要である教員数を確保に関しては問題にはならないと思われる。

学力格差是正は統合によって必ずしも達成できるものではないが、長野県全体として問題となっている、学力成績の2極化（テストの点数が高い生徒と低い生徒の明確な2極化）が見受けられる為、この改善への期待が寄せられている。

「谷が違えば水も言葉も違う」と林氏は述べたように、各地域の習慣や文化の違いを乗り越えることによって生徒の内面的（精神的）な成長が期待されている。



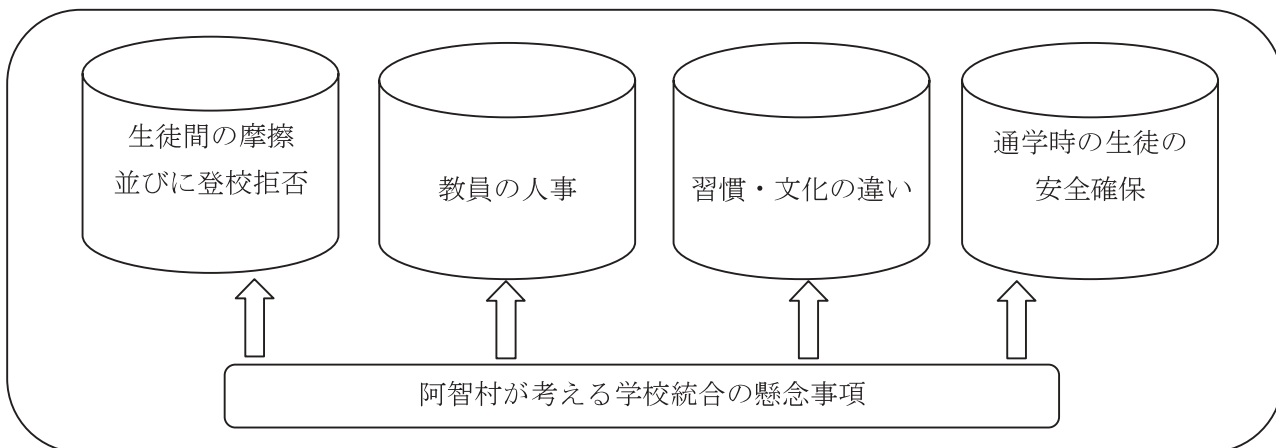
5-3. 統合に対しての懸念事項

生徒間の摩擦から生じる登校拒否が、まず第1に考えられる。統合される側の生徒にとっては、統合される前と違い、教師との触れ合いの機会が少なくなる。その一方であまり馴染みのない新しい生徒たち（統合を受け入れる側）に囲まれ、様々な摩擦・相違点が出てくる。ここでは、これらの相違点を乗り越えるために、教師らの役割は非常に重要である。先述した林氏の言葉のように「谷が違えば水も言葉も違う」ため、学校としては生徒の統合への不安の解消は優先すべき課題であろう。

第2の懸念は、教師人事の問題である。統合によって、重複する教科の教師は他校への移動をせざるを得ない状況が生まれる。浪合小中学校から通うこととなる生徒への支援として、浪合小中学校の教員の阿智中学校への赴任を教育委員会も検討している。

第3の懸念は、通学時の安全確保である。統合に際し、通学範囲が広がると遠距離から登校する生徒が多くなる。当然、教師の登下校時における安全指導も必要となり、生徒の交通安全上の不安も増える。

第4の懸念は、生徒数が増えることや、中学生という多感な時期にゼロから友人関係を構築していかなければならないこと、また1人1人生徒の活発な発言が望めない可能性があり、その機会も少なくなることが予想される。



5-4. 浪合中学校から来る生徒の通学手段、制服等

学校統合にあたっては、生徒の安全を確保しつつ、通学路の整備やスクールバス等による通学手段について検討をし、対処を行っている。浪合地区在住の生徒の無料のスクールバスを新たに購入し、運行させる方針である。

制服・ジャージに関しては、新たに購入する必要はなく、統合を機に制服やジャージのデザインを一新した為、阿智中学校のものを使用することになっている。その為すでに阿智中学校の現1年生生徒は新しいものを着用している。

校章は阿智中学校のものを使い、校歌は阿智中学校の校歌にそれぞれの地区のものを組み入れたものに作り変えていく予定である。

6. 結論

学校統合には期待と取り組むべき課題の双方が生じる。今回の調査を通じて明らかになったことは、少子高齢化の傾向の中で青年層の一層の団結と地域への貢献を期待する声が非常に多いということである。この為村全体が一致団結し、学校統合への実現を目指していくことが模索の中でも建設的に行われている。しかし、阿智村と旧浪合村との統合が決定された時に学校統合が一つの条件として列挙されたのち合意に至ったが、依然として住民の中には学校統合への嫌悪感を募らせている方もいるのも事実である。実際、学校という存在はその地域の文化並びにアイデンティティを育み且つ護りゆく重要な存在である為、学校統合に地域住民が敏感に反応を示すのは自然のことであると感ずる。特に浪合地域においては、中学生に期待し、彼らが果たしていく役割が大きい。その為、学校統合で地域の行事の開催日の変更をするまでの事態になっている。

一方、生徒は期待と不安の両面を抱えていることが調査結果から明らかになった。不安面として阿智中学校の生徒は、いじめや人間関係づくり、勉強への集中やこれまでに培われてきた阿智中学校らしさの喪失への不安を抱えていることが明らかになり、浪合中学校の生徒は不安面よりも愛着心から来る浪合中学校が無くなることへの寂しさを抱えている。期待面では、友人の拡大と授業や行事で学校生活がより充実し、楽しいものとなることを大いに期待している。学校長・教頭並びに教員は期待と懸念される様々な事項に対する努力や取り組みを行い、学校統合がより潤滑に進み、生徒全員により充実した学校生活を統合後の阿智中学校で送ってもらえるよう日々献身的な努力を続けている。尚、浪合小中学校と連携し山村留学を行っている通年合宿センターは、今回の学校統合に関して期待と懸念の両面を持ち合わせているが、学校統合が山村留学に来る生徒により良き影響を与え、要因となることを切実に希望している。

教育委員会としては、少子高齢化の中で学校をどのように質を保ち、且つ財政面の現実を考慮した学校運営を行うかを念頭に置き、統合について中心的な役割を果たし、これまでの学校統合の舵取り役を担ってきた。

学校統合はそれに関わる全ての関係者、生徒そして学校を取り巻く地域全体へ大きな影響を及ぼすものである。阿智村における学校統合は多くの乗り越えるべき問題点や懸念事項はあるものの、模索を繰

り返しながら地区、そして村全体が一丸となり 2010 年から始まる学校統合に向け取り組んでいることが明らかになった。全国的に学校統合は都市部又は農村部において多く行われている。今回の調査は農村部の学校統合を対象としたものであったが、阿智村の学校統合の事例が今後更に行われるであろう学校統合の一つのモデルケースとなることを切に思い、報告とする。

謝辞

この度の調査にご協力頂きました、阿智村役場をはじめ、学校の先生方、児童・生徒の皆さん、並びになみあい育遊会の方の皆様に深く感謝し、厚く御礼申し上げます。

参考文献

阿智村役場 『阿智村の統計』 2007 (2007)。

葉養正明[1997] 「公立小中学校の動向と学校改善」、『東京学芸大学紀要第 1 部門第 48 集』、pp.129-146

1 総務省ホームページ <http://www.soumu.go.jp/gapei/>

2 阿智中学校と統合する学校は上記のように浪合中学校だけではないが、時間と場所の都合上、今回の調査では 2 つの中学校に絞ることとした。

3 事前にこちらで作成した質問表では、選択肢を予め用意しどれが該当するか、という形でインタビューを行った。

4 阿智村の統計 2007 平成 19 年 5 月 1 日現在による

5 統合後、阿智中学校へ通う現小学 6 年生を対象とすべきであったかもしれないが、現段階で彼らが「統合」に対しての考えをもっているか判断出来かねたので、中学 1 年生に協力をお願いした。

6 参考資料として、阿智中学校が提供して下さった、「名古屋大学大学院調査実習班訪問資料(2008)」を使用した。

7 朝日新聞 2007 年 10 月 16 日 朝刊 3 面

8 児童・生徒への授業など直接教育活動の充実のためには、児童生徒数に応じた教職員の算定基礎が必要である。学校の先生の定員は生徒数に応じて決まっているが、教員が不足する時は教育委員会に増員を申請することができ、それが認められたら 1 年間先生を増やしてもらうことが可能になる制度である。

■ 国際開発研究科 国内実地研修ホームページ URL
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/project/fieldwork/Dfw/index-j.htm>



■ 過去の報告書一覧

- 『平成6年度国内実地研修報告書—地域に根ざした開発事例の研究—』
- 『平成7年度国内実地研修報告書—愛知県幡豆群—色町をフィールドとして—』
- 『平成8年度国内実地研修報告書—愛知県幡豆群—色町における開発事例の多角的検討—』
- 『1997—98年度国内実地研修報告書—愛知県東加茂郡足助町における多角的検討—』
- 『1999年度国内実地研修報告書—愛知県渥美郡渥美町における多角的検討—』
- 『2001年度国内実地研修報告書—愛知県南設楽郡鳳来町における多角的検討—』
- 『2002年度国内実地研修報告書—岐阜県郡上郡八幡町における多角的検討—Domestic Fieldwork Report 2002: An Interdisciplinary Approach to Development Issues in Hachiman-Cho, Gujo-Gun, Gifu Prefecture』
- 『2003年度国内実地研修報告書—岐阜県加茂郡東白川村における村づくり計画の多面的調査—Domestic Fieldwork Report 2003: An Interdisciplinary Research on Rural Development Planning in Higashishirakawa-Mura, Kamo-Gun, Gifu Prefecture』
- 『2004年度国内実地研修報告書—岐阜県加茂郡東白川村の現状と村おこしの取り組み事例—Domestic Fieldwork Report 2004: A Study on Socio-Economic Situation and Development Planning of Higashishirakawa-Mura in Gifu Prefecture』
- 『2005年度国内実地研修報告書—長野県下伊那郡泰阜村の地域開発へのころみと自律への道について—Domestic Fieldwork Report 2005 Rural Development Planning in Yasuoka Village, Nagano Prefecture and Determination for Village Autonomy』
- 『2006年度国内実地研修報告書—長野県下伊那郡泰阜村地域開発へのころみと自律への道についてⅡ—Domestic Fieldwork Report 2006 Rural Development Planning in Yasuoka Village, Nagano Prefecture and Determination for Village AutonomyⅡ』
- 『2007年度国内実地研修報告書—長野県清内路村に学ぶ住民と役場で改える地域づくり—Domestic Fieldwork Report 2007 Rural Development Management through Collaboration and Participation of Residents and Administration in Seinaiji Village, Nagano Prefecture』

2008年度国内実地研修報告書—長野県阿智村に学ぶ地域再編下の住民と役場の協働のあり方—

2009年3月発行

発行所 名古屋大学大学院国際開発研究科
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
ホームページ URL : <http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp>
電話: 052-789-4952 FAX: 052-789-4951

印刷 (株) クイックス
